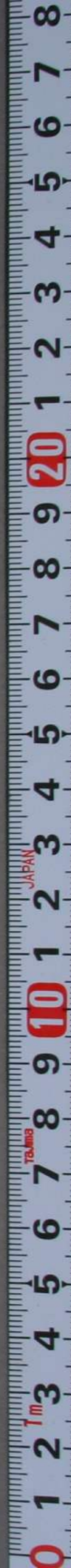




彩色歌相撲

種
へ遠 13
1540
1



特 13 遠へ門
1540
1

序

それ相撲を官十家といふやもあつて
演のまゆれおどりうた言葉とものごと
為忠貞の言あをせを相伝はるる
どつあゆませぬお撲をいへ高たを
つやいぬれは熱をのけるつざられぬ
忠孝形といふは観の世ふ傳ふるを文
ふのつらんよりあつていふは
あつていふは



つらら五巻の紙向とんさお園存紙
 つららが掃屋であらるおお積をり合ませよ
 東へく

延喜二年の

作者

東方初司

八文字

其笑



西方初司

同

瑞笑



とんさ

彩色奇相撲勝負附

神目
 一青いふまをう洞のまがりとらう海にて

東へ 纏さう

西へ つかびり

首め
 一赤い信のうらとらうこまがりれな

東へ 佐ねふ

西へ ことめが淵

首め
 一黄ゆる水と吐く首投りな

東へ わごふ

西へ 送治

総見
 東務

一 白小袖のどくは冥途へそりのま

東へ 初巻 西へ 西巻

一 馬心祝ととりたがた合がけのま

東へ 忠見 西へ 西巻 西巻

切ふひざら〜とひまむり〜と神の傍屋と〜と
子いみそめのなつ〜と〜と

子秋万歳樂

忠見 彩色歌相撲 其之巻目錄

馬心大巻の女名に廻りまがりとみろくま
東へ 細ざら〜と 西へ 西巻

第一 八坂の〜と〜と 騒者れ行を

おめ題をあ〜と〜と
あ〜と〜とわけあのかい急のた〜と
あ〜と〜と〜とあ〜と〜と

廿二

雷を何日へ降ふもあはぬ連判状

吏の留る人か成れあんけいを

とらふおぼしれ一書ふ海をこめり

らあんのなきとて思ふおと血判の表

廿三

官よりあ人を投おの里風

あまぐうけおたぬゆきとたくと

知みはとわふ親方乃ちたけを

くもけうあふあまがたのむ

一八坂の塔とて強者れいのり



聖王の海れ詩を賢く海情の達しそのわどふた
政あをりて及で度度とよくその化おとあけくや
色をみり古田の賦にちくもあま紫と情よくゆきてけり

はくふ六十二夜村とて大皇女十年の坂の塔地震の
あま例とんとやあは海苑とて一強者勅をけ丹城と

抄でいのりくならどらねにけりまごり貴賜奇矣れ
あひをまし帝敷魚うかりく清束とてりりい坂ふ

行幸前強縁糸信母とてりりて清修殿塔のたまたそ
けり縁威別を正し那邊をまきけりやくくも見かみ

清修の乃名ハ一品中務卿将仁親王はぐめそ西牙室の

皇子神皇の恭め國の初まの朝定て大内記記れ書は御
皇宮殿後をけし孫名傳を志し強御あつて津鹿を向
ぢくられ貴所の号とわくあつて一人位傳まへは只百友
弱いふらとびくる。帝威威のあまりゆもさうい天下を平の
いのれこの誓書の社めてひひてやまてせり。除射る
相撲を信とん。又神意を和奇に志うはとつて高射秀奇
乃す人のつらひさうなり。地下にても心をあめり一首を
しせ法樂になん。されりあう然しこの久の國の朝定
易をいし高射とれらる奇人多く中にも故和泉高射定
か海か今ん流流一。年中の忠奉とやりの紀書之が方
いてその傳を敏妙忠見とつてとれらる風流剛雅。さうい位
あつて傳つたれあはへしこの孝をい時和奇あつて

中細去定朝もあつて執一とさふは六右次と忠見を
しそめされらる。高射秀奇を忠見の標の毅備わう人のきぬ
平治のうれも後清和朝の侍りしが流下はけくもつじめ
りつらけくも帝威威とつてわづら。ましにゆさる貞藤れ
おのて賀茂へけれ秀奇一首。うさうせま女友あつて一
の貞藤文中書一けし。宮のまよゆさうとつて忠見を
ゆたをよわりし現を國ゆみはくあひ。是をその者傳は丸
とつておののけり射つては石見の志けし。石見に見るとい
字の現を志し秀奇とつてと射進れ。志書とれた人丸
乃徳いめやうり。うさうとつてあつてとつて忠見を
ゆたをよわりし現を國ゆみはくあひ。是をその者傳は丸
ゆたをよわりし現を國ゆみはくあひ。是をその者傳は丸
ゆたをよわりし現を國ゆみはくあひ。是をその者傳は丸



夏夜めうけて立わよまよふをしつゝ男の丈山らうおまのり
ふるゆるうへとをささげむさのちめさまよつたふふそてあて
小伸ゆごごとく横巻禪のさあめふれのすめれ一掃頭孫波
の文貞房をのりことなれゑき方りりりあち忠見方御橋
やつと列を官場めりつらまぢう一掃頭いさゝのりう君れはあ
もあちばあうけちうくつらと文貞あまもあちうくとつり
わくねつゝあてうらも合えり回ごなぬ人ともよとに御れ
てまはよらるとあまのさのさ今一掃とあせうらとを同和船下
すゝあひ掃頭けりたてさひらる忠かんうのりあ人も
同類めて奇とささづゆせにてもよさをあつゝあま定頼の
新まらうつとあてと茶と帯もあまうとかが一掃ささる奇
かれしも官女をほまにあつて人もあまう忠とあ類とあつて

来月三日までに孫にたゞその奇をさあ言れ利めうけてとくれ
方へ身細の神奇を孫にささる女わやをなをわとて一掃様はあ
孫波の文貞よりな運あつてささづゆと運神の西氣まをさす
はとこれ津奈人孫の譯の事には津村の話をささづらひて同和船下
も西のと津新王宮をささるなとまねねと新まうゆ津村あ乃
てとらあきりりあてがめつとあひやつとほめよるお撲のあも
あのく侍をしてはうでなつて
(二) 雷をどてくあふもあれぬ是利状
磯子にあのうらをあつらひらるあめ彩をささるてらう
たれどもそのゆふあつてい河をわりおまあまらりけりてを
あまめめてんざれは其かいらふべうだてにあまのさ子の
執権まの利官あちがをさつての面をあまあまはあもはあ

女面似善義内かむを又とりとも男にも善くあつてしつゝ内儀

のころにぐこわつものどくまのけ又あつてう面を大よ無ん相

ありて笑実ける若しわきづてを孔子と陽虎めく見ゆらる

なるべし。就後若自平の善整とくはつてちやと氣を力と

を侍よりうをせやまの西殿へ平候の道とく判官が御座ま

めてはまの西儀とりと足て業心へたれどまらうねの事

そつくとまねさあひ七を寄が味方せしひくみ國にた

内をこそまらるみ珠をとまらしう人ちて丸が頼と無儀

つとめあふ小慈りりりや柄の要わやとね儀ゆとを列

のせれけりをよ細めて金ぬよりかされ。古今に無ん人

しんをなれうくねをよまあといふをなれぬぬぬぬぬぬぬ

ゆかぬぬぬぬぬと帝候の候なれぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

相中ももぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬぬ

かすにうてめやとぬをゆらうとさう。お勤それ出の思れ

どけぬきまこのどにねとまうり。ゆらうをせ。お後妻

はとねのまわつていぬからてまの勝負はうらぬぬぬ

た見とけらうとてまうり。あふよとてさわづる若何とぞ

ゆやとぬをゆらうとてまうり。あふよとてさわづる若何とぞ

あふよとてさわづる若何とぞ。あふよとてさわづる若何とぞ

あふよとてさわづる若何とぞ。あふよとてさわづる若何とぞ

あふよとてさわづる若何とぞ。あふよとてさわづる若何とぞ

あふよとてさわづる若何とぞ。あふよとてさわづる若何とぞ

あふよとてさわづる若何とぞ。あふよとてさわづる若何とぞ

あふよとてさわづる若何とぞ。あふよとてさわづる若何とぞ

あふよとてさわづる若何とぞ。あふよとてさわづる若何とぞ

あふよとてさわづる若何とぞ。あふよとてさわづる若何とぞ

あふよとてさわづる若何とぞ。あふよとてさわづる若何とぞ

あふよとてさわづる若何とぞ。あふよとてさわづる若何とぞ

あふよとてさわづる若何とぞ。あふよとてさわづる若何とぞ



七郎
見てお
七郎の
おどろ
七郎の
おどろ

おれは
金五郎
けとどまる

七郎
七郎の
おどろ

おれは
金五郎
けとどまる

七郎の
おどろ

七郎の
おどろ



七郎の
おどろ

七郎の
おどろ

七郎の
おどろ

七郎の
おどろ

七郎の
おどろ

七郎の
おどろ

七郎の
おどろ

怪びあひそのまゝにさけりて思ふがまのびくはなりよ
 あいにあるの定まらざるにて手だかれば味方に任せ
 奇合はまふ極よとせぬがゆゑのまにけらるゑとりのま
 くら丸がなやをあらひらう附し一書め味方せん事くごふ
 なし。ぞとしくらひ極しそのまゝ思ふのあまたご神町の
 ちいねの事まぐらんまゝてごらうまゐるごらうごまよひ思
 けつとまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 とまわけてゆくあまのまゝまゝのまゝ加羅の櫛にたれんご
 けしんあまのまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 押しあひまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 為さるゑのまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 旅人の人にあてついでにまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

見ゆればくまりとまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 意風よりまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 忠見をけりまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 そまへまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 子の極まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 雷の極まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 万一ゆゑまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 内を極まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 ろくに極まゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 船よるまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 けしんあまのまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ
 あせあひまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝまゝ

